

うけれども、さもなく今、まの當り、この様な言語も盡さない鐘美の
一域に一分時でも住んでゐて、空想にしろ刹那でも將軍家や乙姫
の心持を體したと云ふ、こゝは私の一生の記録に残してもよいことであ
らう。

足尾へ

日光は遂に去る日まで雨の日光だった。午前八時、一行は舟を出
して中禪寺湖を阿世湯へ向ふ。波は高かった、命の惜しい人は青い
顔してゐた。動くさ覆へる。舟底にたまった水は、座の上まで浸し
てゐる。中禪寺湖から阿世湯まで、水にしたつて座つたまゝの身う
ごきも出来ない小一時間、しびれのきれたのはつらかつた。石の上
に三年ゐた人につくつく同情する。舟の横腹を打つ波が散つては、
みんなの頭から顔から無遠慮にあびせかゝる。心頭を滅却しても水
は仲々冷たかつた。それでも、湖の中へ放り出されるよりは上乗であ
る。一同は身うごきもしなかつた。

ふさ、後の方で西村先生の御話が始まつた。中途で切れて薩摩琵琶
になる、次に詩吟になる。青くなつてゐた一同もつり出されて歌
ひ出した、うたふさいふのか、うなるさいふのか、なるさいふの
か、その邊の言葉には不案内だが、板一枚の下は地獄であつた湖上
がたちまち、虚空に花ふり音楽聞ゆる天人の舞殿と化したのであ
る。

もう動いてもよしと、船頭から許しの出た頃は、動かうにも動か
れぬ位しびれてしまつてゐた。

「足尾の烟毒で、あれです」と船頭は言つた。あゝ、此岸のみじめさ
秋半ば織りなしたにときは對岸、此岸は冬がれた木枯のささぶ立

報 雜

1. 七月三十一日午後一時から、講堂で在京の
文科會員が、折から講習や何かで在京中の卒業生
諸氏をお招き致しました、菅原先生の衣服の話
(別項)及錦畫に就いての講演が御座いました。
御忙しいところを下村先生、細田先生、岡田先
生、高橋先生等お越し下さいましたし、また卒業生の方々はお揃で
押しかける様においで下さいました。講演後も其處此處に卓子を圍
んで先生方の中に、大方薄暗くなる迄夢湯などを汲んでうちさけた
お出で遊ばすのを、幹事たちは泪ぐましい程嬉しく思つて眺めて居
りました。ほんこによい企だつたと存じます。

2. 暑中休暇の中に一度在京の者が寄りあつて、静かな木陰に暑
さを忘れながら、先生方のお話を伺はうさいふ相談が、かれてあり
ました。当日集りましたのは十人程で、それに河崎先生、千葉先生
も御見えになりました。正面の坂を登つて左の方へ、まっすぐに通
つた道の奥、軟かい草がなつかしい香を漂はせてゐる原を行きつめ
た處の、蔓梅もごきの棚の下にベンチを並べました。お話しの際は
「歐洲近世の思潮と、その我國に及ぼせる影響」といふのでしたが
其の外何くれこの話を伺う中に、國語を教へようとする者の用意
さといふやうな事が、しみんく考へられました。又、河崎先生、千葉
先生のお挿みになつたお言葉も、私共にはよい教へ草と思はれまし
た。

雲勝ちの空の下に、日光の威壓をしばしがれた木々は思ふさま

木である。

こ、ふと鼻をつく嗅ひがある。

「あの臭ひは何ですか?」

「煙毒の臭ひです」船頭は得意然と答へた。

「煙毒の臭ひ?」舟はコットン音がして、靜に岸へつく。

これから足尾への峠越しである。上り八町、下りは三里、いさゝ
か慣れたが自慢の一同には、八町の山のぼりは何でもなかつた。某
の草鞋のかゝるのわくく、口あくのを笑ひ止めた頃はもう峠の茶
屋にかけてゐた。下りの三里は骨である。丸木橋を渡り、谷川の岩
を飛び越えて行く位は体操を習つてゐるみんなには、何の事でもな
かつたが——丸木橋は平均塞の應用、岩を飛ぶのは三步前進高飛び
の應用——連日の雨で道がすべるのには困つた。足の拇指に力を入
れて歩くと、すべらないと聞いた。

けれど、それさへこゝではきゝめが無かつた。ウンミ力を入れた
まゝでツルリと苦もなく滑つた。

煙毒の臭ひは、ますますはげしくなつた。

坂はあと二里、滑らない様に。滑らない様に。

□冬

屋根も道も眞白く霜に被はれて人通りの極めて少ない町を
未だ明け切れない灰色の空が寒く被ふて居る。柳の枯
葉が舞ひ落ちる、練瓦塀の上に止つた鳥が仔細らしく小首
を傾けて居る。それを十二三の手も頬も眞赤にした男の子
が、赤ちやんを真ん中で黙つて見上り立つて居る。子供にも
鳥にもないらしい冬が通りすがりの私の心に在た。

文 一

葉をのびし、そのかげからは、蟬の聲が、ゆるやかなメロディをな
して流れて來ます。緑の蔭のそよあるきに、午近くまでの時を過
して別れました。

3. 臨時會、九月二十三日午後二時より八時まで、田邊尚雄氏を
聘して、蓄音機入りで西洋音楽史の御講話を願ひました、随分盛況
でした。

4. 例會、十二月一日午後二時より、

- | | | |
|------------|----|-------|
| 一、作文朗讀 | 一年 | 丸山ひさえ |
| 二、現代日本畫の傾向 | 四年 | 篠崎益枝 |
| 三、其詩暗誦 | 二年 | 河原セイ |
| 四、列強國歌につきて | 四年 | 吉田キヨ |
| 國歌の發表は次號に | | 志田登代 |

おしらせ

一、例會 二月初旬
校長 湯原先生を煩して御話を伺ひ且教育及教授法に關する
會員の研究を發表いたします。
會員賛助員の皆様御來會下さい。

本學期の研究は音楽繪畫に關してでありましたから、本號もそ
れに因つて編輯致しました。